

ラクロ「危険な関係」-「秘密」による戦略

堀 米 俊 美

1. 小説形式としての「手紙」と人物の行動としての「手紙」

書簡体小説においては、作中人物たちはそれぞれに個別の視点で同一の事象を語る事が可能であり、したがって、語られる事象の像は立体的なものとなりうる。これはこの小説ジャンルのもつ最大の特性のひとつである。あらゆる小説に語り手の存在を認めるとして、語り手の向こうに作者の影が見え隠れするような種の小説にくらべて、手紙を書くすべての作中人物が分担して語り手の役割を果たすことになる書簡体小説においては、小説の作者は、テキストの背後に完全に姿を隠すことができるのである。

だからといって、この「語り」の多重性を他の「語り」の手法の上位に置こうというのではもちろんない。各々の人物の視点は暫定的で移行する性質のものであり、しかもそれぞれの情報量、可知領域はおのずと制限されたものであるため、言及される出来事の真実性について責任を負う立場のものがいない。したがって、小説の読者が読書において行う解釈はつねに不安定とならざるをえず、いわば逐次試練にかけられることになる。

はじめから読者に当てられたテキストというものを想定してみると分かりやすいのだが、小説を構成する各々の手紙は、それぞれの受信者に当てられたものであり、少なくとも表面上は、小説の読者を意識したものではない。「手紙」はそもそも一対一の交信手段であり、読者はいわば盗み読みをする立場に置かれているのである。この形式のもつ特徴を前提とするとき、われわれは手紙によって構成された小説というもののあり方（読まれ方）を再検討せざるをえなくなるのであり、その際、「手紙」という表現媒体のもつ機能の確認が要求されるわけである。

「手紙」は、原則的に一対一の交信手段である。文通という行為は、ある程度親密な間柄において成立する。そして返事を期待しない一方的な手紙というものの頻度は極端に少ない。このことは、同じく書簡体小説というジャンルでくくられてはいても、作品ごとに大きく性質を異にする重要な点である。忘れてならないことは、「手紙」のもつ親密さの指標としての意味である¹⁾。

手紙個々の含む内容については、各々の手紙は、文通者どうし以外の第三者に知られてはいけないような情報をふんだんに含んでいる。しかるに、手紙は書かれたとい

うことで、一過性の会話とくらべて物証として残りやすく、また盗み見される可能性もある。このことはすでに、「手紙」という媒体のもつある種の本質的矛盾をかいま見せている。われわれはもはや『危険な関係』について語り始めているわけだが、この小説においては、作中人物どうしの文通の動機として、位置的な隔たり、すなわち「手紙」という交信手段を用いなければ意志を伝えられない、というようなことは考えにくい。同じ屋敷の住人どうし、日中しげく顔を合わすどうしの手紙の量もまた相当であるからである。こうなると、作中人物たちの文通の動機は、文通することによって他者と関連をもち、そのことによって作中における自己の存在理由を獲得しようとするところにある、と解釈せざるをえないであろう²⁾。

『危険な関係』における「手紙」の機能を「秘密」の委託とするのは、以上のような考察からである。発信者がある特定の人物（他者）へ、第三者には知られていない、もしくは知られてはいけない事柄を打ち明け、受信者はそれを預かるという図式＝信用関係が、小説全編を覆っているのである。作中人物たちを図に示し、そこに文通の有無で線を結べば、すなわちその図は、人物どうしの親密度を表すとともに「秘密」の共有関係の図でもあるだろう。そして、その中心にメルトウイユ夫人が位置を占めているのである。

2. メルトウイユの「秘密」による戦略

メルトウイユに秘密を打ち明けた者は、彼女との間の信用関係を前提にしているのに対し、メルトウイユはこの信用をまったく逆手にとる。「手紙」は「秘密」の委託であるという暗黙の了解事は、メルトウイユが手紙を書く（受け取るのではない）ときにだけ、当てはまらない。打ち明けられた「秘密」を思うがままに運用するメルトウイユの、作中における特権的立場は、ひとえに「手紙」という媒体のもつこうした特性の逆用の上に成り立っているといえることができる。ところで、メルトウイユ自身は「けって手紙を書かない」と言明しているのだ。

Ces précautions et celle de *ne jamais écrire*, de ne livrer aucune preuve de ma défaite, pouvaient paraître excessives, et ne m'ont jamais paru suffisantes (...). Cependant, si vous eussiez voulu me perdre, quels moyens eussiez-vous trouvés ? ³⁾

ヴァルモンに手紙を書いたということが、結局は彼女の命とりとなる。彼女は手紙を書いてはいけなかったのである。しかし、作中にメルトウイユが君臨するためには、彼女は手紙を書かざるをえないのである。この点を、矛盾として放棄するのではなく、逆説ないし『危険な関係』という小説の構造上の必然として解釈を試みることは、この小説の独自性の究明という作業において、不可欠のように思われるのである。

まず初めに、書簡体小説は「手紙」によって組み立てられた小説であるから、作中人物は書くのが当然であるという見方がある。この場合、メルトウイユの手紙を書くという行為は、小説ジャンル自体のもつ矛盾として片付けられる。語られるべき事象があって、それをAという人物が単なる報告者としてBという単なる受信者に書き送るといふだけの形式の小説ならば、この種の矛盾はまったく問題とならない。しかし、「危険な関係」において、メルトウイユは専ら報告を受け持つ人物ではないし、また、受信者に徹した人物でもない。しかも自ら、自己の処世術の大原則として「けっして手紙は書かない」と明言しているのであるから、この矛盾は、小説の手法としての矛盾というよりは、メルトウイユの人物の内包する矛盾ということになるだろう。

「手紙」は本来、「秘密」の委託という側面をもつ。用件だけを伝えるための書簡もないわけではないが、「危険な関係」中の大部分の書簡は、この側面を有している。メルトウイユは実際「手紙」のもつ「秘密」の委託＝信用関係という側面を十分に承知していて、自分に委ねられた「秘密」を運用することで、小説世界における自己の特権的地位を維持している。小説中に、出来事を追って筋を読みとろうとするときにはまさにその中心にあるように見えるヴァルモンが、決定的にメルトウイユに劣るのは、じつにこの点なのである。

Vous voyez bien que, quand vous écrivez à quelqu'un, c'est pour lui et non pas pour vous: vous devez donc moins chercher à lui dire ce que vous pensez, que ce qui lui plaît davantage⁴⁾.

メルトウイユの半生の手記である第81信⁵⁾で、彼女みずから告白していることだが、まず彼女は恐るべき人間観察者である。「暴かれては都合の悪い秘密をもたないような人は一人もいない」⁶⁾ことをみてとる。次に彼女は、その人間の弱点であるところの「秘密」を入手すべく、完璧な偽装術を身につける。実行動においてもそうだが、もちろん文通においても、おおいにこの術を有効に用いる。そうして手に入れた「秘密」と、「秘密」の委託によって張りめぐらした信用関係を、まったく意のままにもてあそぶところに彼女の彼女たる所以、存在証明があるわけである。

そのようにしてメルトウイユの手元に集まってくる「秘密」が、作中にどのような意味をもつかといえば、まず一つ、「秘密」は小説の構成要素そのものである。メルトウイユの存在のおかげで、われわれは作中人物個々に関する情報を得ることができるのであり、この点で、メルトウイユはいわば小説の編纂者のごとき役割を果たしている。と同時に、それら「秘密」は、生成し、護られ、ついには暴かれるという過程をとおして、作中人物というよりもむしろ、読者であるわれわれの興味をひき、読書におけるサスペンスを約束している。メルトウイユが「秘密」の運用により他者を操縦していくとき、彼女の存在は、いってみればこの小説の作り手としての性格を帯び

ることになる。危険きわまりなく困難でさえある処世術だが、完璧な理論武装と巧みな手練手管により、メルトウイユが徹底してそれを実践しつづけていく限りにおいて、彼女の行う「秘密」による戦略は、以上のような価値と役割をもつのである。しかし、依然として、彼女の人物の内包するある種の矛盾を解決できたわけではない。

もう少しメルトウイユという人物の考え方を追ってみよう。彼女は、話すということと書くということとの間に、はっきりと一線を設けているようである。トゥールヴェル夫人にヴァルモンが手紙を書いたと知ったとき、自分の考え方を述べてこう書き送るのである。

Mais la véritable école est de vous être laissé aller à écrire. Je vous défie à présent de prévoir où ceci peut vous mener. Par hasard, espérez-vous prouver à cette femme qu'elle doit se rendre ? Il me semble que ce ne peut être là qu'*une vérité de sentiment, et non de démonstration* 7) .

ここに、メルトウイユの考え方の特徴がよく表れている。「感情の真理」と「論証の真理」について、彼女は見事にその両方を使い分けるのであり、しかも手紙を書くという行為はまさに後者に属するのであり、なにか「手紙」を書くときには書く者の「知」が試されることになり、したがって、こういう言い方をしてよければ、メルトウイユは自己の「知」の能力に支えられて「手紙」によって成り立つ世界に君臨しているわけである。より多く知る者が、より少なく知る者に対して優位を占める。メルトウイユの戦略の根底には、明らかに彼女の万能の「知」が存するのである。

では、なぜ「全知」であるはずの彼女が、最後にきて失敗したのか。やはり、この点に納得できる解釈を与えない限り、「危険な関係」という小説のもつ意味はあいまいなままである。そういった観を禁じえないほどに、メルトウイユの舞台からの去り方は唐突であり、かつ、あっけないのである。

3. 「秘密」によって編まれた人物関係

「秘密」という概念に、その隣にある「謎」という概念を引き合わせてみたい。人類は太古から数限りない「謎」を解き明かしてきた。「謎解き」は、すべての学問、いや、あらゆる文明の歴史であり所産であった。それほど大袈裟にいわずとも、人が「それは秘密です」と言うときと「それは謎です」と言うときの状況の違いを考えてみるだけで十分である。前者には、それを知る者といまだ知らぬ者の存在が前提としてあるのに対し、後者はそうではない。知る者はいないのである。「秘密」とは、決して「謎」ではなく、とりあえず維持されてはいても、いつかは暴かれるべきものである。個人の胸に永久にしまっておかれるような「秘密」は、「危険な関係」に

おいては、まったく意味をなさない。人物たちは「手紙」を書くよう宿命づけられており、そしてその「手紙」は「秘密」の委託にはかならないからである。「危険な関係」において、「秘密」はすべて暴かれるよう運命づけられていると言ってさし支えないであろう。

ところが、メルトウイユの扱う「秘密」には、たしかに、それを暴露する可能性を示唆することによって他者を操り、終いにはそれを暴露して相手に決定的な打撃を与えるような「秘密」もあるのだが、一方、暴かれては困る、存在を疑われてさえ困るような「秘密」もあるのである。セシルは初め、ヴァルモンが自分に好意的であることを不可解に感じている。しかし、ヴァルモンがメルトウイユと密かに通じていることなど思いもよらない。ダンスニーもそうである。いや、作中人物すべてそうである。作中に起こる出来事は、おおかれすくなかれすべて、そのことに起因する。この意味で、メルトウイユ＝ヴァルモンの同盟関係は、「謎」でありつづけなければならなかったのである。しかるにこの「謎」は、解き明かされた。作中最大の「秘密」である二人の関係も、やはり暴かれる運命にあったのである。

しかし、メルトウイユは失脚の前夜まで「全知」であったはずだ。その気になれば「秘密」の露頭は防ぎえたはずである。それが、自らの選択によって、「謎」であらねばならなかったヴァルモンとの関係をダンスニーに漏らし、自らの栄華に終止符を打った。ここに、メルトウイユという人物の如何ともしがたい矛盾があるわけだが、その解明に役立つ、興味ある事実が一つある。メルトウイユ＝ヴァルモンの同盟関係の暴露という最終兵器、それによってヴァルモンは命を落とし、ダンスニーは都を去り、セシルは修道院に篋もり、その母は悲嘆にくれ、画した張本人のメルトウイユは社交界を追放されることになるという、まさに世界の崩壊をもたらすはずのこの自爆装置が、少なくとも一人、トゥールヴェル夫人をその射程に取り込めないのである。トゥールヴェル夫人にとっては、ヴァルモンの背後にメルトウイユの存在することなど、まったくどうでもよいことなのである。彼女は、その欲するところにより、狂乱による衰弱の死の際まで、ヴァルモンを愛し、信じつづけて死ぬのである。メルトウイユの戦略の限界を考えると、このことは非常に重要である。

そもそも「秘密」による他者の操縦、およびその露呈による打撃は「知」による策略の図式の上に成り立っている。「秘密」の運用は「知」が司るのである。つねに相手よりも多く知っていることで優位を占めるという原則こそ、知略によるメルトウイユの支配を可能たらしめてきたのであり、だからこそ読者はメルトウイユ失墜の刹那まで、彼女の退場を予見することすらできずに、彼女と視点を共有せざるをえなかったのである。その図式が、一人トゥールヴェルの存在によって瓦解の危機を迎える。メルトウイユにとっては、知性のかけらもなく愚直きわまりないトゥールヴェル夫人という人物が、この世で自分に比肩しうる唯一のヴァルモンの心をつらえ、彼をまさに向こう岸に連れてゆかんとしている。人間の精神を二分する感受性と知性の象徴を

その二人の女性に見て、その対立および相互補完のあり方を「危険な関係」という小説の成立基盤に認めようとするものの可能性は、そこから生ずるのである⁸⁾。

いまひとつ視点を変える必要がある。われわれ読者は、ヴァルモンが、一方でトゥールヴェルに心ひかれつつも、メルトゥイユとの復縁をしつように望んでいることを知っている。メルトゥイユはその希望をかなえてやろうという柔振りをずっと見せていて、結局はそうなるのではないかという印象さえ与えている。しかるに、ここにメルトゥイユが最後の最後まで読者に隠しとおしてきたことがある。それは、実は彼女は、盟友のヴァルモンさえも己の策略にはめようと図っていたことである。

Sérieusement, Vicomte, vous avez quitté la Présidente? vous lui avez envoyé la Lettre que je vous avais faite pour elle? En vérité, vous êtes charmant; et vous avez surpassé mon attente! J'avoue de bonne foi que ce triomphe me flatte plus que tous ceux que j'ai pu obtenir jusqu'à présent. Vous allez trouver peut-être que j'évalue bien haut cette femme, que naguère j'appréciais si peu; point du tout: mais c'est que ce n'est pas sur elle que j'ai remporté cet avantage; c'est sur vous: voilà le plaisant, et ce qui est vraiment délicieux⁹⁾.

実際、この箇所にて、読者は混乱し、まさしく小説がメルトゥイユの企てたとおりに展開してきたことを否認なく知らされることになる。しかし、メルトゥイユが最後になって明かしたその「秘密」は、他の作中の「秘密」とは明らかに性質を異にする。それは「秘密」を共有する者のいないことである。そもそも「手紙」は発信者だけでは成り立たないものであり、その意味で、書簡体という形式の上に成り立つ「危険な関係」は、手紙のその特長を十分にいかした小説であるから、作中人物たちは他者と関係を結ぶことに自己の存在証明を見出すよう宿命づけられているわけだが、したがって、メルトゥイユの君臨を支援するものとしてのヴァルモンの存在は不可欠のものであったわけだが、この件に関しては、メルトゥイユは「秘密」の共有者をもたない。共有者をもたないとき、「危険な関係」において「秘密」は実効性を伴わないようにできている。ヴァルモンを裏切ったことは、「秘密」の共有者の拒絶であり、すなわち、戦術の法を踏み外したというよりも、自分の特権的立場の自発的な放棄を意味するのである。では、何故、創造主は自ら地に降りたのか。ここにきて初めて、読者はこの小説の作者ラクロの存在を意識するのである。

4. 出来事から人物への読書の更新

再読が最良の読書であるかどうかはべつとして、読書が一回性のものであるべき必然性がないじょう、再読という読書の手続きは認知されてよいものであろうし、ま

た、それが一回限りの読書と比べて、テキストの内容の掌握について、より有効な手段であることも否定しえない事実であるだろう。少なくとも、テキストをはさんで読者が作者を意識しようとするならば、それは再読の、それもあとう限り綿密細心な再読の手続きをふまえてなされるべきであろう。

メルトウイユは、その失脚のときまで、出来事の情報源としては語り手に近い立場にあり、出来事の企画者としては作家の役割を果たしてさえた。読者は、彼女の目を通して作中世界を認識せざるをえなかった。しかし、彼女は突然に姿を消す。

(...) nous ne lisons plus aucune lettre des deux protagonistes qui s'éliminent mutuellement. De l'épilogue disparaissent ainsi les personnages qui ont servi de narrateurs durant tout le roman; privé des confidences de Valmont et de Mme de Merteuil, le lecteur devra donner lui-même une signification aux événements que lui livrent des témoins extérieurs à l'action ¹⁰⁾ .

エピローグの中に、もはやメルトウイユの手紙はない。語り手の役目はおもにヴォランジュ夫人、ダンスニーへと引き継がれるが、読者はそれまでの経験から、ヴォランジュ夫人の報告には著しく客観性が欠けていることを知っている。くらべてダンスニーのそれは、はるかに信用に足るものだが、しかしそれはたんなる事後報告でしかなく、読書をひっぱりような緊張感といったものがまったくない。だが、それでよいのかも知れない。もはや出来事のレヴェルでの物語は終わっているのである。エピローグを読みながら読者は徐々に、メルトウイユに裏切られたという印象を深め、おのれの読書に対する不安感を抱き、そして、再読へと駆り立てられるのである。

では、再読によって何が変わるのであろうか。もはやわれわれは、メルトウイユの策謀の手際の見事さには感心しない。「秘密」の生成とその露頭に到る過程にもスリルを感じない。「秘密」は読書を促進する興味とサスペンスとしての価値を失い、なぜ、どこで、どういうふうにして「秘密」は作られ、そして暴かれたのか、というようなことが検証されることで、小説の題材としての価値のみを有することになる。そして、メルトウイユは、一回目の読書のときとはまったく違った有り様で、読者の目に映ずることになるのである。

En relisant le roman, nous sommes de moins en moins enclins à être éblouis par les < succès > de Merteuil et de Valmont, et de plus en plus prêts à refuser, à mettre en question leur éthique d'abord si séduisante. Tout en cherchant à comprendre les mobiles de ces personnages, à résoudre une contradiction apparente entre leur <

philosophie > et leurs actions, le lecteur est amené à examiner les prémisses de sa lecture du texte ¹¹⁾ .

出来事の企画者としての役割を放棄したメルトウイユに、もはや読者を眩惑する力はない。被創造物であることの宿命、もしくは作中人物としての限界を見せたメルトウイユの「知」をわれわれ読者の「知」が上回るとき、彼女はもはや一介の作中人物へと降格し、そのことをわれわれは再読によって検証するのである。

5. ラクロの「秘密」による戦略 — 人物と作者

作中人物と作者を認識の同一レヴェルで論ずることの危険は、十分に配慮されなければならない。しかし、ここまで見てきた「秘密」にまつわる現象学のようなものをふまえて、また、語りの戦術としての「秘密」の果たす機能を考慮しつつ、メルトウイユと作者ラクロの存在、その為したことを比較してみることは、いちがいに無意味な試みとも言えないであろう。少なくとも、創造に関わる「知」のレヴェルで、両者には共通の働きが認められるからである。

メルトウイユは「秘密」による戦略を駆使して、意のままに他者を操縦し、出来事を企画する。もしメルトウイユが画策しなければ、小説は事件をもたなかったであろう。彼女が狙ったのは、他の人物すべてを「知」のレヴェルで自分より確実に下位に置き、その優位をもって、いわば作中から作中世界を構築しようとする試みである。ところが彼女は挫折する。メルトウイユの失敗は、一見、彼女の人物の抱える矛盾のように思われる。彼女がヴァルモン、つまり「秘密」の共有者を放棄してしまったことに、その直接の原因があると断じたわけだが、実は、それは小説の作者の意図ではないだろうか。ここでの文脈と用語にそって言うならば、最後に孤立したメルトウイユと「秘密」を共有しているのは、作者ラクロであるということになる。そして、彼らが、知的戦略の対象としているのは、ほかならぬわれわれ読者なのである。

メルトウイユに特権的立場を与えておいて、自分はその背後に完全に隠れ、最後に彼女を唐突に舞台から降ろすことによって、読者に、メルトウイユという人物について、「危険な関係」という小説について、ひいては、被創造物である作中人物と創造者たる作者の関係の仕方について再考をうながしつつ、おのれのテキストの読みの検証へと向かわせる。ラクロの戦略は、このように二重の構造をもっているのである。

結語

「秘密」による戦略、すなわち「知」にかかわる語りの戦術として、メルトウイユとラクロをつなぐ相似の図を得たとしても、実際それは「危険な関係」のある一面を語るものでしかない。再読によってメルトウイユが一介の作中人物に墮ち、それでも

なおかつ作者の「知」の領域の一部を体現するものとして位置づけられるとき、相対化のならわしとして、メルトウイユという人物の対極に浮かび上がってくるトゥールヴェル夫人の影を見落としてはならない。「知」の象徴であるメルトウイユの支配の絶対に及ばないもの、それは、どうしようもない人間の「感受性」である。知力による優劣関係の原則は、知ろうとしないものにとっては、まったく効力を失ってしまう。むしろ、そうそうものの存在によって存在理由を危うくされるのは、前者のほうであるだろう。戦略の武器としての「秘密」にだけ焦点をしばったため、この小論はメルトウイユに関する言及に終始してしまったのだが、「危険な関係」におけるリアリズムのあり方の究明のためには、その形式面からのアプローチとともに、人間心理の分析など内容面からの接近も要求されるべきであり、その双方が過不足なく融合されたとき、この小説の本当の姿が明かされるはずである。われわれはまだ、ラクロと秘密を共有しているわけではない。

注

- 1) 「手紙」は情報を伝える機能を有すると同時に、その含む内容に関係なく、その存在だけで意味をもっている。たとえばトドロフは、その手紙の「伴示性」の研究の中で、この二つめの側面を「親密さ」の表れ、と診断している。そして、それを意識的に逆用するという点に、メルトゥイユという人物の特徴を見ている。

Cf., Tzvetan TODOROV, *Littérature et Signification*, Larousse, 1967, pp.29-37.

- 2) 筋をおりなす出来事に係わっていて、手紙を書かない人物はいない。この点で、「危険な関係」は徹底している。まさしく当事者同士の往復書簡のみによって構成されているわけである。手紙が後半以降にしか現れないロズモンド夫人は作中に最初から存在しているのだが、やはり筋に関与してくるのは後半の第三部からである。ソフィーはセシルの文通相手ではあるが、ほとんど匿名に近い存在であり、事実、出来事がかきょうに入るやセシルは彼女に手紙を書かなくなり、その存在は忘れられる。セシルの婚約者のジェルクール伯爵の名前ほど、しばしば出てくるにもかかわらず、読者にとって印象のうすい名前があるだろうか。プレヴァン、エミリーなどは、小道具の類であろう。

- 3) LACLOS, *Les Liaisons Dangereuses*, in *Oeuvres complètes*, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1979, LETTRE 81, pp.175-176.

- 4) *Ibid.*, LETTRE 105, pp.242-243.

トドロフも上記の箇所を引用して、次のように述べている。 < Cette description révèle brillamment les traits qui distinguent les lettres de la Marquise de celles de tous les autres personnages; elle est la seule à viser, dans toutes ses lettres, la réaction de son interlocuteur, et non l'expression de ses sentiments. Même Valmont ne se conforme pas aux idées de Merteuil dans la plupart des lettres qu'il lui adresse. >

T.TODOROV, *op.cit.*, pp.36-37.

- 5) 第81信は特異な手紙である。メルトゥイユがヴァルモンに対して、えんえんと自叙伝を語るのである。少女の時代からすでに人の心理の観察に興味があったこと、逆に自分の心は隠せるように修行したこと、対する人によって仮面を使い分けること、今まで体験してきたかすかすの性悪な所業、などなど。物語の進行にとっては一見無意味にさえ思われるし、読む者を退屈させかねないほどに長い手紙であるが、メルトゥイユがけして自分の「秘密」を他人に渡さない以上、こういう形で独白せざるをえないのである。しかし、最後にきて彼女の致命傷となる、ダンスニーが公のもとにさらす二通の手紙の一つがこの手紙であることを考えれば、メルトゥイユの人物像を探るときと同様に、ラクロの仕掛けたメルトゥイユ失脚の構図の伏線としても、非常に意味の大きい手紙である。

- 6) *Op.cit.*, LETTRE 81, p.333.
- 7) *Ibid.*, LETTRE 33, p.67. (強調筆者)
- 8) まったくルソーの影響の色濃い試論であるところの「女性教育論」で描かれた自然の女性 (*femme naturelle*) のイメージを投影して、トゥールヴェル夫人に「感受性」の象徴を見ようとする事は可能である。どうしてもヴァルモンに心ひかれてしまう彼女の心理に「恋」を認めてよいのであれば、この恋はすなわち感受性の賜物であり、したがってトゥールヴェルとヴァルモンは互いの感情で結ばれているということができよう。それに対して、ヴァルモンがメルトウイユの方に顔を向けるとき、彼は「知性」による駆け引きを展開しようとするのである。
- 9) *Op.cit.*, LETTRE 145, p.333.
- 10) プレイアード版編者 Laurent VERSINI による第百五十九信の注 (p.1396) 。
- 11) Ronald C.ROSBOTTOM, « Roman et secret: le cas des *Liaisons dangereuses* », in *Revue d'histoire littéraire de la France*, juillet-août, 1982, p.599.